

隣で、ふう、とため息が聞こえて、藤十郎は手のひらで顔を拭つて目をやった。男は機体に被せていた防暑布をそのまま被つてきたらしい。整備場から物を持ち出すのは禁止なのだが、置いていくと土まみれになるし風に飛ばされる。どうせ濡れるなら布を被つてくれば人は濡れない。機転が利く男なのだと一瞬の判断に感心した。

男が布の中から藤十郎を見る。濡れて重みを増した白い布は、男の頭や首筋、肩の線に沿つてしなやかに垂れている。腕の緩やかな曲線に見られる。その縁に生える長く反り返つた睫毛にも。夢で見た観音様にそっくりだと思つた。男は怪訝そうにこちらを見ている。はつと気づくと藤十郎は口を開けたまま男を見ていた。慌てて知らんふりをして俯く。

「あ……おま、……貴様、はこの隊だ。見かけない顔だな」

布を折りたたんでいる男に尋ねた。やはり近くで見ても見覚えがない。

男は冷たいくらいに整つた顔に、微かな不愉快さを浮かべて答えた。

「問うほうから名乗るべきではないのか」

階級章をつけていない藤十郎に対して「いぶん口の利き方だ。上官だったらどうするつもりだと思ひながら、藤十郎は男の無礼を許すことにした。

「二〇六空付きの、谷藤十郎一飛だ。これでいいか」

名乗ると男は嫌そうなため息をついた。名乗つただけで失望されたのは初めてだ。男はあまり機敏ではない敬礼を藤十郎に寄越した。二人とも帽子を被つていないが、初めの挨拶は儀礼的にこうするヤツもいる。

「緒方伊魚、一飛だ。多分、今日から貴様とペアになる」

「貴様が緒方一飛か」

この男がペアというのにも驚いたが、緒方が持つ独特の雰囲気も意外だった。あまり機嫌のよくなさそうな気配。い敬礼の下ろしかたも、妙に垢抜けているというか、なまめかしい男だ。

「ああ、よろしく」

緒方はまた息をついた。少なくとも心から藤十郎を歓迎している様子ではない。気に入つてはいない、だが不服にも事前に心で折り合いをつけてきた、そんな印象だった。藤十郎も気分は察せられるところだ。自分と同じだ。求めたわけではないが他にいないから仕方がない。あてがわれたものを受け入れるのが軍人というものだ。

「よろしく」

藤十郎は緒方に握手の手を差し出した。緒方は藤十郎の手を見下ろしてためらつたあと、仕方なくといった様子で、手を伸ばしてきた。ひやりとした手だ。雨に濡れたせいかわ、それにしても温度が低い。魚を掴んでいるようだ。と藤十郎は思った。藤十郎がしっかりと握る前に緒方はすぐに手を引いた。指も搭乗員とは思えないくらいほつそりとしていたが、関節が控えめに立っているのが女の手とは違っている。

両首は最高潮を迎え、機銃の一斉掃射のようだ。雷が空に金色のヒビを走らせる。滝のような雨の向こうに見える稲妻は、毛細血管を透かしているようだ。

遅れて轟く雷鳴を聞きながら、藤十郎は横目で緒方を眺めた。緒方は出世でラバウルに来て浮かれているという雰囲気ではない。

焼けたトタンのにおいがしていた。雷が空気を裂く音。砲声と遜色ない落雷がドオンと地を揺らす。雨に閉じ込められた島の片隅で藤十郎は彼に問うた。

「緒方は榮転か」

もしも緒方に事情があるならば、うっかり地雷を踏みたくない。彼の個人的な事情の奥深くにまで踏み込まないまでも、喜ばしいことか悲しいことか、方向性を把握しておくだけでも致命傷は避けられるだろう。

彼はその問いさえも嫌そうに、ほっそりとした濃い眉の付け根に皺を寄せた。藤十郎に視線を流し、また元に戻して雨を見る。

雲から海へ、垂直に光の矢が突き刺さる。バリバリと荒々しい雷鳴が鳴りやむと同時に緒方は呟いた。

「左遷だ」

ほとんど予想通りの答えだった。緒方は軽く空を仰ぎ、雨を見つめたまま気怠そうに首を傾げる。一度目を閉じるような長い瞬きをしてから、横顔のまま問う。

「貴様がここへ来たのは志願か」

今度は緒方が訊く番だ。藤十郎の態度から緒方は多分、藤十郎が「命令だ」と答えるのを予想しているのがわかる。少しばかり愉快だった。緒方の予想はハズレだ。してやったり、と思いつつ藤十郎は笑って応えた。

「志願だ」

婚約者に逃げられ、故郷や基地で居たたまれなくなつて、逃げるように南方へ志願したのが立派かどうかは知らないが。

「……めでたいことだな」

緒方は面白くなさそうだった。

「横須賀航空隊から来た。歳は二十二。横空では艦爆に乗っていた。飛行時間は七百時間。撃墜数は二、ここに来る前に彗星の訓練は積んできた。よろしく」

過不足のない自己紹介だ。ただベテランと言うには飛行時間が少なめだ。

「よろしく。内地では館空にいた」

「館山か。なぜ志願した」

館山は大きな基地だ。内戦作戦実施部隊だから、あそこになれば隊が転属にならない限り最後まで内地にいられただろう。理由を訊きたそうだが事情は教えたくない。

「忠義というやつだ」

藤十郎はすまして答えた。

「そうか。飛行時間は？」

「八百十時間。単独撃墜は四、命中九、轟沈は一だ」

答えると緒方が藤十郎を意外そうに見た。内地の人間に比べれば格段な練度の高さだ。

「ラバウルを甘く見るなよ？」

「頼もしいな」

緒方は応じたが大して喜んではない。唇だけ笑っているが目に光がない。

スコールの終わりははっきりしていて、カーテンを開けるように雨の区切りが動いていった。ぱあっと空が明るくなる。逃げるように雲の影が地上を動いていった。

雨上がりの景色を見るたび、藤十郎は何度でも驚くのがあった。まるで世界が洗い流されたようだ。葉に降り積もっていた火山灰や埃、空気中の塵さえ雨に払われ、ただでさえ色彩の強い景色は、浮遊物のないまっすぐな陽光に照らされて新しい光沢が輝いている。磨りガラスを一枚外したかのような鮮やかさだ。そのあとむわっと緑の気配がして、草木が悶えて、陽炎のような気を立ち上げているのが見える。雲行雨施というヤツだ。雲は空を移動しながら無差別に地上を美しくし、植物や動物に水を施す。

飛沫のような細かい霧雨の降る中へ、建物に避難していた将兵たちがまたわらわらと飛び出してくる。

「行こうか」

藤十郎は緒方に声をかけて小屋のデッキを飛び降りた。緒方が続いでくる。

さまざまな容器に溜まった雨水を、ドラム缶を載せた三輪自動車回収に來ている。足元にある器を両手に持つていつてドラム缶に注いだ。これは給水塔に貯められ、濾過されて真水として使用される。

彗星のほうを見ると、雨の後始末で整備員が忙しそうに走り回っている。うろろろしたら邪魔になりそうだ。

緒方は整備員に近寄って腕に抱えていた防曇布を返し、「またあとで来る」と一声かけて藤十郎とともに整備場を離れた。

先ほどまでの暴風雨を忘れたように、頭上には何食わぬ顔で濃い青空が広がっている。夾竹桃の濃い緑色をした葉の上を、雨の玉が転がっていた。澄んだ空気で深呼吸をすると身体の隅々まで潤う気がする。

「俺は、彗星は空輪で、搭乗員は今日の夕方の船で着くと聞いていた」

「その予定だったが、船の都合で搭乗してきたんだ」

急だったのはわかるが、先に藤十郎に顔を見せに來てくれればいいのにと思いながら、当たり障りのない話をしながら二人で兵舎に戻った。玄関口で別れて各自の荷物を整理し、新しく割り振られた兵舎の寝台に向かう。ペアだから同じ隊だし寝台も隣同士になる。明日から食事も整列も一緒だ。

ペアと言えば一蓮托生、一心同体、命を預け合う仲で、親以上、妻以上、無二の親友、自分の運命を握る者だ。初対面の緒方を相手にいきなりそんな態度を取るにはまだ気恥ずかしいが、関東出身、階級も同じで歳も近いし、すぐに親しくなれるだろう。

緒方が遅れてやつてきた。片付けの様子を見ていると几帳面そうだ。荷物は少なく食品や煙草などの嗜好品もほとんど持っていない。

——明日死にそうな男だ。

身の回りのこざっぱりさに藤十郎はふとそんな感想を持った。整理のために床に広げられた彼の持ちものから「明日」を窺えるものがない。生への未練や執着が見えない。推察しかけて藤十郎は急いで打ち消した。自分のペアになる男だ。彼が死ぬということは自分が死ぬということだ。あまりにも縁起が悪い。誰だつて死にたくないはずだ。きつと新しい任務にあたり、身辺を整理して、清冽な覚悟で臨もうとしているのだろう。

藤十郎も今まで彫つた数体の仏像を林の奥の大きな木の根元に置いてきた。

自分の荷物もそんなに多くはない。航空隊員の常備品以外には、保存食とトランプ、髪の毛の油瓶などの小物、珍しい品物と言えば鑿と板くらいなものだ。藤十郎はさつさと片付けて、手持ちぶさたそうにしていた緒方に声をかけた。指で円をつくつて口許のところをくいつと叩る。

「お近づきの印に、今夜一杯やるか」

搭乗割に入っていない日は、基地周辺にある俱樂部で酒を飲むのが基地の流行だ。前線基地だが店は内地より洒落ていて、酒の種類も多いし美人の女給もいる。これから生死を共にする仲だ。戯れにでも固めの杯でも交わしておくのが円満のコツだろう。

「いや、けっこうだ」

藤十郎の心遣いがわからないのか、緒方の返事はすげない。

「用事があるのか」

「ない。人が多いところがあまり好きではないだけだ。行きたいなら貴様一人で行ってこい」

「そうではなくてだな……」

無理に誘つても悪いなと思ひ、藤十郎は気を取り直す。

「それじゃあ羊羹をやるろうか」